

の葉は落ちるし、水道は水を出しつばなしにするし、どうして私ばかりかし、知らん顔して居られませう」と、女中が云ひました。

「まあ、鼠がスープの中に沈んだんですつて、ぢやあ、私は世界中をあつち、こつちかけまはりませう」と云つてかけ出しました。

それから今でも、下男はせつせとかけまはつて働いて居ます。(ドイッお伽噺)

○野山に住む者

はてしなく廣い野原に、大きな牡牛の頭の骨が雨風に晒されてころがつて居る。これを丁度いゝ住家にして其中に小さい二十日鼠が澤山住んで居る。

歌の聲

「元氣な〜二十日鼠

小さい鼠は寒くない

暖で氣もちがいい」

廣い原の、地平線下に日が沈むと、空には星が一ツ二ツ、だん〜宵暗になる。二十鼠の住家には、美しい、よく光る燈火が、ともされる。鼠の踊りが、はじまる、歌の聲がまたする。

歌の聲

「元氣な〜二十日鼠

小さい鼠は寒くない

暖かで氣もちがいい

おどつて、うたつて、

ウイオー、ウイオー」

星の影一つ〜失せて、眞暗になる。冷たい風が吹く。チラ〜、雪が降り出す、濕つぱく、だん〜強く眞白にもる。二十日鼠の住家のみあかるく、楽しさうに、歌たり、おどつたりする。鼠の聲たえずする。

歌の聲

「ウイオー、ウイオー」

やがて、雪の上をポツ、ポツと飛ぶ者がある。よく

見ると大きな白兔。後足を揃へて一齋の前に立つので、足跡がたつた一ツにしか見えない。ポチくと妙な足跡をのこして飛びまわる。時々後足で立ち上り、前足を垂げ、耳をピンと後にあげ。まんまいる目で方々キヨロくと見まわす。其内鼻をむしや／＼擦り何かブツ／＼云ふと。あつちからもこつからも。澤山の小兔がよつて来るそして、牛の頭の骨のまわりをビヨン／＼おどりまわる。

歌の聲

「元氣な／＼二日鼠

小さい鼠は寒くない

暖かで氣もちがい、

おどつて、うたつて

ウイオー、ウイオー」

白兔「何だらうあの妙な聲は、風が吹くと聞こえる。

ああ、あれは二十日鼠の歌に違ひない」

やがて大きな白兔真直に後足で立ち上り。大き

な聲で、

「行けッ」

四方八方へちり／＼ばら／＼に小兔ども飛で行く。

あとへ、やせた灰色の狼、のそり／＼と来る、兔の足跡を嗅ぐ、鼻をフン／＼させながら、ふさ／＼した尾を後へさげて、あちこち嗅ぎまわる、しばらくして止つて坐る。今雲間から出た月に向て物凄く咆える。空腹を満す爲に兔を食べたい様子。兔はとうに遠くへ飛んで行つて見えない。ただ鼠の歌が小さく、かすかに聞えて来る。

「元氣な／＼二十日鼠

小さい鼠は寒くない

暖かで氣もちがい

うたつて、おどつて

ウイオー、ウイオー」

風にさそはれて異な聲がきこえる。

大な鼻「ホ、タア、ホ、ホ、タア」

森の方へ狼いそぎ足に行く。鼠の住家の燈火は消えて、子鼠達寢間にいそぐ。母鼠は梟が燈火のついた鼠の住家を見付け出したことを氣付いた様子。

母鼠「早く、早く、」

子鼠どもみんな、寢間にいそぐ、歌の聲も踊のさわぎもばつたり止む。

朝が来る。大きな梟は翼の下に首を入れ、まんなるな二つの目をつぶつて睡つてしまふ。鼠のさわぎ出すのはもう梟には見えない。子鼠どもは元氣よく起き、木の實をさがしに、チョコ／＼かけまわる。

歌の聲「ウイオー、ウイオー」

風にさそはれて、かすかに。だん／＼近く他の聲がする。

「ヒッ、オ、キッ、オ、ヒッ、オ、キッ、オ、」

向ふから、棒の先にあみをつけたのを持つて土人の子供達がかけて来る。やがて大きな梟をつか

まへ、家へつれて歸る。太い棒くひに梟をしばりつける。梟はそこで晝の間は日の光をまぶしさうにまじ／＼して居る。夜になると鳴き出す。

梟の聲「ホ、タア、ホ、タア」

その時、土人の子供達は牡牛の毛皮につままれて、火のそばに枕をならべて寢てしまふ。

外には雪が眞白に降りつもる。

白兔が飛びまわる。

やせた狼が月に咆える。

そして元氣な鼠がうたひ出す。

「ウイ、オー、ウイ、オー」

(北アメリカ土人のお伽噺)